

# 博士学位論文審査要旨

2021年7月13日

論文題目： マイモニデスにおける神への道程  
—神を知解することと人間の生き方との相関性に関する考察—

学位申請者： 神田 愛子

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 アダ・タガー・コヘン

副査： 神学研究科 教授 勝又 悦子

副査： 同志社大学名誉教授 水谷 誠

要旨：

Ms. Aiko Kanda has written an impressive doctoral dissertation, focusing on the celebrated 12<sup>th</sup> century philosophical book *The Guide of the Perplexed* by the Jewish philosopher Moshe ben Maimon, known as Maimonides. In it she demonstrated both wide knowledge of Medieval Jewish and Moslem philosophy, and original approach to this well-studied text. This work is the first in the Japanese language that treats in detail the work of Maimonides' book.

In the first chapters of her dissertation Ms. Kanda gives detailed background information on several issues pertaining to her dissertation, including the history of Medieval Jewish philosophy, its interactions with Moslem philosophy and through it with ancient Greek philosophy (Aristotelian, Platonian and Neo-Platonian), as well as a description of the life and work of Maimonides. She then elaborates on the history of his major philosophical work, and its many translations from Medieval to modern times.

In her dissertation Ms. Kanda did not limit herself to *The Guide of the Perplexed* alone, but also utilized other philosophical, ethical and legal compositions by Maimonides. She also related to and engaged with the work of several scholars who interpreted Maimonides' difficult book over the ages. It is often said that Maimonides wrote for us *The Guide of the Perplexed*, leaving us perplexed and looking for a guide who will explain it to us. It is indeed a very difficult work, written esoterically in purpose, so only a few greatly learned people could understand it. Ms. Kanda showed ability in tackling this book, demonstrating linguistic ability in both Arabic and Hebrew. Among other things, she examined Maimonides' way of biblical exegesis, his concept of language and grammar, his use of Rabbinical sources, and his criticism of Christian and Moslem theologies.

The core of the work is a close examining of several chapters from *The Guide of the Perplexed*, while putting them in context of contemporary philosophy and theology of the Medieval world. Ms. Kanda examined major issue in the *Guide* such as the "Attributes of God," "Human Free Will," and the "Path to God." She had focused, on the one hand, on Maimonides' strict concept of God, and on the other hand, on the implications that this concept has on the ideal human way of life. She has thus combined metaphysics with ethics, showing that Maimonides argues that the two spheres can be combined through the true knowledge of God,

leading to individual perfection.

よって、本論文は、博士（一神教研究）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

## 総合試験結果の要旨

2021年7月13日

論文題目： マイモニデスにおける神への道程  
—神を知解することと人間の生き方との相関性に関する考察—

学位申請者： 神田 愛子

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 アダ・タガー・コヘン

副査： 神学研究科 教授 勝又 悦子

副査： 同志社大学名誉教授 水谷 誠

要 旨：

In April 2009 Ms. Aiko Kanda entered the second term course at Doshisha University Graduate School of Theology, and as she received research guidance, and met the prescribed requirements, she submitted the thesis on March 2021. On Tuesday, 6th July 2021, for two hours from 15:30 to 17:30, the Dissertation Committee of the Graduate School conducted a comprehensive examination and has been satisfied with the knowledge shown by Ms. Kanda in regard to the theme of “The Path to God in Maimonides: Reflections on the correlation between knowing and understanding God and the human way of life.”

Ms. Kanda has demonstrated a close familiarity and fluency of the text of Maimonides, and her abilities of other languages in reading research literature, such as English, German, Hebrew, Arabic, Greek and Latin were confirmed. Therefore, we conclude that the result of the comprehensive examination is successfully passed.

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

# 博士学位論文要旨

論文題目： マイモニデスにおける神への道程  
—神を知解することと人間の生き方との相関性に関する考察—  
氏名： 神田 愛子

## 要旨：

本論文で主に扱った、マイモニデス『迷える者の手引き』（以下、『手引き』とする）は、秘伝的性格を有しつつもユダヤ人共同体全体の向上を意識して書かれており、彼の意図は、愛弟子に秘教的教えを伝授することよりも、ユダヤの伝統的教えと哲学的学びに矛盾を感じる者に適切な学びの書を提供し、共同体をより良くすることにあつたと言える。本論文は、彼の哲学的名著『手引き』の他、『ミシュナー註解』『父祖』巻序『八つの章』と、『ミシュナー・トーラー』第1巻「知識」の二つの倫理的著作を扱い、彼の提唱する神への道程、すなわち、知性的で正しい神理解に至るための彼の内なる秩序観を明らかにし、その上で「神を知解すること」と「人間の生き方」の相関性を論じることを目的とした。本論文は『手引き』の章立てに沿いつつ、「神の本質と属性」、「戒律と人間の自由意志」、「マイモニデスにおける神への道程」の、三テーマに基づき、神の知解と人間の生き方に繋げることを念頭に論を進めた。

本論文では、序論にて『手引き』の読解法を検討し、自分なりの方法論を提示した。序章では、マイモニデスの研究動向を踏まえつつ、彼の時代の政治的・社会的な背景と、彼の生涯と著作を概観し、中世ユダヤ思想における彼の思想の位置づけと影響関係を考察することにより、本論文の執筆の意義を明らかにした。理性と啓示の関係性は中世思想の中心的テーマの一つであるが、本テーマに最初期に取り組んだ思想家はイスラームの思弁神学者アシュアリーで、一派はガザリーを経てイスラームの正統派神学となった。一方、クルアーンの合理的解釈を志向するムウタズィラ派の思想は、中世ユダヤ思想に影響を及ぼした。中世イスラームでは哲学と神学は明白に異なる学問であったが、マイモニデスは、主知的で人間理性を中心に据える哲学と、神の啓示を重視し人間と神との関わりに重きを置く神学の、相互の関係性の議論で中世思想に影響を与えた点で、重要な思想家と言えるであろう。第一章では、『手引き』読解の方法論的考察を、『手引き』第2部30章の「創造の業」解釈に基づき提示した。彼の創造論を理解するには、創造に関する彼の基盤的考え方を知る必要がある。彼は創世記の解釈にラビ文献を用いており、ラビ文献の解釈においても自然学と文法学の知識が必須であると理解した。『手引き』全体を理解する場合も、創造論と同様、文法学と自然学の知識、特に、質料と形相の不可分性と同音異義語の多義性の理解が必要であると推察されよう。

第一部では「神の本質と属性」について論じ、まず第二章で、カラーム批判の観点からマイモニデスの属性論を論じた。彼の属性論は、アリストテレスの論理学に範をとった「属性の五分類」を基盤としており、カラームの議論が存在論や認識論的に論じられる一方、彼の属性論は文法論的に論じられ、そこにはアリストテレスの『範疇論』の論理分析の影響が伺える。マイモニデスは、「心で表象できない」キリスト教の三位一体は単に名のみ概念で存在し得ず、神の実体的属性を肯定するアシュアリー派の教義も名目的概念として批判している。また、完全で最高であることも、すべてのものと異なることも、両者とも比較不能という点では同じで矛盾せず、アリストテレス的見解と否定神学の間での矛盾は解消可能であるとした。マイモニデスの属性論はカラー

ムの方法論に対する批判から出発し、アリストテレスの論理学を用い枠組みを構築したものと結論づけた。

第三章では、マイモニデスの考える神の本質と属性について、『手引き』第1部53章と54章を中心に神の働きの観点から論じた。彼の属性論は、イスラーム神学に対する批判から発しているが、彼は属性論を文法的に分析することで、行為者の能力や時制等の付帯的状态の意味を含まない動詞の原形の完了形だけが神の属性として適用可能であるとし、神の行為の属性だけを肯定した。神は物性を伴わず、変化や欠乏のない完全な存在であり、いかなる事物とも類比不能ゆえ、限界のある人間の言葉では神の本質の叙述は不可能である。従って神の名は、神の本質の表象に近くとも、完全に神の本質を表わし得るものではない。以上、マイモニデスの属性論の意義とは、否定的な神の叙述を通して人間に神の理解を促し、神の行為の属性を神の本質的属性とすることで、人間の行為を徳の行為に繋げることにありと理解されよう。

第二部では、マイモニデスの法学的著作と『手引き』で解釈が異なる、「戒律と人間の自由意志」について論じた。まず第四章では、戒律の論拠づけを廻る問題を、『手引き』第3部27章と『ミシュネー・トーラー』の関連箇所を繋ぎ合わせることで彼の主張を明らかにした。彼の考える戒律の二つの目標とは、悪行を排し、社会的に有益な徳性を身に着けることで「体の完全さ」に達し、健全な信条と正しい見解を得ることで「魂の完全さ」に達することであるが、一方、戒律の究極的な目的とは、これら二つの完全さを目指して現世を良く生きることで後の世に到達することにあると理解した。ただし、この究極的な目的は、法規の改変の問題を大衆から隠すために明らかにされておらず、それは『手引き』と『ミシュネー・トーラー』、『ミシュネー註解』を相互補完的に解釈することで初めて捉え得る。彼にとって戒律とは、現世をより良く生きるためにあり、個別法規の遵守よりも戒律全体が目指すところを知り、神を知ろうと探求し続けることにこそ、究極的な戒律の目的があると結論づけた。

第五章では、ユダヤ法の観点から人間の自由意志について論じた『八つの章』と『手引き』とを比較し、神の摂理と人間の自由意志に関わる彼自身の見解を『手引き』第2部48章を中心に考察した。結論として、第一に、人は自らの意志で特定の行為を選択する能力と自由を有し、神がその自由を妨げることはないこと、第二に、基本的に自然法則と摂理は同一と捉えられるが、神と人の知性の結び付きに応じた「天使の介入」により神の力が及ぶことがあり、それが個に対する神の「摂理」と捉えられること、第三に、すべての出来事はその直接的原因を問わず最終的に神の意志に帰せられ、個に対する神の介入は人の知性では理解不能であること、以上が彼の「神の摂理」と「人間の自由意志」についての見解と理解した。弟ダビデの難船での落命を念頭に置いた箇所から、彼自身「すべて神の意志」とせざるを得なかったと推察した。どのような状況に置かれようと、義なる行為を選択し続けることが人間のし得る最善だということが、人間の自由意志と神の摂理に関して、マイモニデスが伝えたかったことと言えよう。

最後の第三部「マイモニデスにおける神への道程」では、本論文の副題である、神を知性的に理解することと人の生き方がどう関わるのかを考察し、まず第六章では、神の知解に至るまでの学びの順序を明らかにした。彼は『手引き』第3部51章の冒頭で、この章の目的を「神に固有な真理を知解した者による崇拝を説明し、人間の究極の目標であるこの崇拝に導き、命の袋に至るまで、この世の住処における神の摂理がいかにあるかを知らせること」と述べており、51章の言説は「命の袋」、つまり永遠の命に至る間に人間が辿るべき道程と捉え得る。彼は譬え話の解釈から、神との完全な関係に至る過程を七段階に分けて論じ、最後の神に謁見する段階に至るには、神に専心して神に近づく努力をし、知性を強め、神を知解した後には愛を持って神を

崇拜し、思考を常に神に向けねばならないと説く。人は知性により神を理解した上で愛する対象である神を熱望し、神と結び付くことを一心に求めるべきというのである。マイモニデスは、神に近付くためには学びの順序があり、最初は学問の基礎となる数学と論理学を、次に可視的な被造物を理解するために自然学を習得し、その上で、不可視な世界を扱う形而上学を習得する必要があると論じる。彼は聖書やタルムードの引用から同胞のユダヤ人読者に訴え、学問の基礎的知識の習得なしに秘儀的知識を学んでいては神に近付くことは出来ないと、「ベン・ゾマはまだ外にいる」というタルムードの言葉を通し、愛弟子と彼の読者に伝えようとしたのであろう。

最後の第七章では、人間の完全性は知解と生き方の何れにあるかを、『手引き』結論部の第3部52章から54章より論じた。マイモニデスは、人間の完全性は所有、身体、倫理的徳、理性的徳の四つであるが、真の完全性を目指す者は、所有や身体といった物的完全性や、他者との関わりにおける倫理的徳の完全性ではなく、神に関する正しい見解である理性的徳を第一に探求すべきだと述べる。ただし、医師であり法学者でもある彼が、健康や法の遵守の重要性をないがしろにするとは考えられず、従って、所有や身体、倫理的徳の完全性の土台の上に、真に神を知ることを探求すべきというのが彼の主張と理解し得る。彼は、人間の完全性に達するには、真の学知である神の知解の探求に注力すべきと主張する一方、真の人間の完全性とは、理性的徳を獲得した後、神の行為の属性の「慈愛、審判、公平」を求め続けるその道程にあると説く。マイモニデスにとっての真の完全性とは、神を知り、理解するという究極的目標を目指しつつ、理性的徳である神に関する正しい見解を自身の内に生涯をかけて内在化させ、その内面より、自ずから神の行為の属性に倣った行いが発せられている状態と言い得る。従って、神を知解することを求めつつ、神に倣った行為を実社会で為し続けることこそが、マイモニデスにとっての神への道程であると結論づけられよう。